

～ 隅田川神社所蔵の貴重な資料は必見～

**明治 150 年企画展「水神社の世界―失われた景観と源頼朝伝説―」開催中！**

現在、すみだ郷土文化資料館（向島二丁目3番5号）では、明治150年企画展「水神社の世界 失われた景観と源頼朝伝説」を開催している。約800年前、現在の墨堤付近には隅田宿という中世の宿があり、『吾妻鏡』では、源頼朝はここから隅田川を渡り鎌倉幕府を開いた。本展示では、この隅田宿の空間内に存在したと伝わる水神社（現在の隅田川神社）に伝来する資料を中心に、中世隅田宿の景観と源頼朝伝説について紹介している。

水神社は、明治2年に矢掛弓雄という人物が神主となり、同6年に現在の社名である隅田川神社を称している。江戸から明治という時代の転換点に、小さな神社がどのように生き抜いたのか。そこには、地域に眠る源頼朝伝説が深く関係していた。本展示では、矢掛弓雄が江戸時代の縁起を元に編纂した「隅田川神社縁起」（明治4年、隅田川神社所蔵）をはじめ、隅田川神社に伝来する源頼朝伝説資料を展示している。

興味深い資料は、「伝頼朝橋礎（隅田川神社所蔵）」。これは、江戸時代後期、幕命によって通船の妨害となっていた隅田川底の橋杭を抜いたところ、泥中より発見された橋の礎である。隅田川神社の神主・矢掛弓雄は、この礎を源頼朝によって架けられた橋の礎と考えたという。また、「都鳥の文台（隅田川神社所蔵）」は、この橋杭から作成されたもので、江戸琳派の祖である酒井抱一が書を寄せている。

これら展示資料には水害の痕跡がいたるところに残されており、墨田区が震災や戦災のみならず、あまたの水害を乗り越えてきた地域であることも物語る。このほか、山岡鉄舟筆による扁額など、同館でしか見られない資料を中心として、中世の墨田区の歴史や水神社の世界について知ることができる本展示は11月25日（日）まで開催している。



《写真》 ～ 企画展示の様子

《資料》 企画展「水神社の世界 失われた景観と源頼朝伝説」のチラシ  
すみだ郷土文化資料館だより「みやこどり」第55号（平成30年9月発行）

《問合せ》すみだ郷土文化資料館 5619 - 7034（広報広聴担当 5608 - 6220）  
お問合せは、午後5時までにお願いたします。

< 企画展示関連講座 >

「隅田川神社資料と矢掛弓雄」

日時：平成30年10月13日（土）午後2時～4時

講師：中山学氏（法政大学非常勤講師）

「隅田川神社所蔵「伝頼朝橋の礎」をめくって 隅田川と中世の橋」

日時：平成30年10月28日（日）午後2時～4時

講師：田中禎昭（専修大学准教授）

<すみだ郷土資料館について>

区は区民の郷土文化に対する理解を深め、区内の歴史資料の収集、保存を行うため平成10年4月12日にすみだ郷土文化資料館を開館した。同館では、常設展のほか、隅田川とその流域の歴史・文化に関わる様々な資料を紹介する特集展や様々な角度からテーマを設定して行う企画展などを年に数回開催している。

所在地：墨田区向島2丁目3番5号 開館時間：午前9時～午後5時（入館は午後4時30分まで）

休館日：毎週月曜（祝日の場合は翌日）・第四火曜日

入館料：個人100円・団体（20人以上）80円 電話：03-5619-7034

次の(1)(2)の方は無料

- (1) 中学生以下の方
- (2) 身体障害者手帳・愛の手帳・療育手帳・精神障害者保健福祉手帳をお持ちの方又はその介護人

すみだ郷土文化資料館だより

MIYAKODORI

# みやこどり

みやこどり(ゆりかもめ)は、すみだを舞台にした和歌に登場するなど墨田区にゆかりのある鳥です。

第55号 2018年(平成30年)9月発行

ふれあい活かす

すみだ

ふるさととの出会い、ときめきへの旅。

**すみだ郷土文化資料館**

131-0033 東京都墨田区向島二丁目3番5号

☎(03)5619-7034 ☎(03)3625-3431

電話番号は正確に。

[http://www.city.sumida.lg.jp/sisetu\\_info/siryou/kyoudobunka/index.html](http://www.city.sumida.lg.jp/sisetu_info/siryou/kyoudobunka/index.html)

E-mail [sumida-htm@city.sumida.lg.jp](mailto:sumida-htm@city.sumida.lg.jp)

■開館時間

午前9:00～午後5:00(入館は午後4:30まで)

■休館日

毎週月曜日(祝日に当たるときは翌日)

毎月第4火曜日

■観覧料

個人100円、団体(20人以上)80円、

中学生以下、身体障害者手帳・愛の手帳・

療育手帳・精神障害者保健福祉手帳を

お持ちの方は無料



資料1 伝・頼朝橋鏝(隅田川神社所蔵)／江戸後期、幕命によって通船の妨害となっていた隅田川底の橋杭を抜いたところ、泥中より発見された橋の鏝。隅田川神社の神主である矢掛弓雄は、地域に伝わる源頼朝の隅田川渡河伝説から、この鏝を源頼朝によって架けられた橋の鏝と考えた。

明治150年

企画展

## 水神社の世界 - 失われた景観と源頼朝伝説 -

会期：平成30年9月15日(土)～11月25日(日)

およそ800年前、現在の墨田区墨堤付近には、隅田宿という中世の宿がありました。ここは武蔵国府(府中市)と下総国府(市川市)を結ぶ古代東海道が横断し、中世には品川から北上する鎌倉街道下道が隅田川を経て交差する地でもありました。こうした水陸交通の要衝には「宿」と呼ばれる「都市的な場」が形成され、地域の中心となります。隅田宿もそのひとつでし

た。15世紀に成立する『義経記』には、隅田宿の対岸にある石浜地域が「西国船の著きたる」場所と記されており、隅田川を挟んだ隅田宿周辺の地域が太平洋海運を関東の内陸へ迎え入れる玄関口として機能していたことがわかります。

また、隅田宿をやや南下した現在の白鬚橋上流付近は、中世の隅田川渡河点と考えられています。そのため、この地には源頼朝の渡

河伝説や太田道灌による架橋伝説が伝えられ、やがて地域のアイデンティティとして注目されていきます。

本展示では、中世隅田宿の空間内に建てられたと伝わる水神社(隅田川神社)所蔵の資料を中心に、近代以前の当該地域の景観と地域に眠る源頼朝伝説について紹介します。

## ■隅田宿周辺の風景と源頼朝伝説

現在の隅田川神社(堤通2-17-1)は、江戸時代以前には水神社、水神宮、浮島宮などと呼ばれていました。昭和46年(1971)開通の首都高速六号向島線建設に伴い現在地に移転しましたが、もともとは100mほど北の隅田川に沿った場所に鎮座しており、そこは、かつての中世隅田宿の空間内でした。

中世前期の隅田宿は、対岸の石浜を含めた隅田川渡河点として江戸氏の知行にありました。治承4年(1180)、源頼朝は伊豆で拳兵し石橋山で敗北ののち、房総半島から軍勢とともに陸路で源氏の故地鎌倉を目指します。このときに頼朝軍にとって重要な課題となったのは隅田川の渡河でした。『吾妻鏡』や『義経記』などからは、洪水で氾濫する隅田川を、江戸氏、葛



資料2 天神像(伝・近衛信尹筆/隅田川神社所蔵)/隅田川神社の末社である元関屋天満宮の神像と伝えられる。

西氏、千葉氏など、この地に影響力のあった武士たちが協力して渡河させた様子が描かれます。また、隅田宿から下総国府へ延びる古代東海道は、文治5年(1189)の奥州合戦時に源頼朝の通路ともなりました。その街道沿いに創建された若宮八幡宮には、頼朝による戦勝祈願の伝説とともに、関係する奉納品が残されていました。このように、交通の要衝であった隅田宿とその周辺(現在の墨田区北部地域)には、歴史とともに源頼朝にまつわる伝説が伝えられていったのです。

こうした地域の核を形成する宿の空間は、寺社が集中する場でもありました。中世の寺社は、信仰や葬送の担い手というだけでなく、学問や土木などのインフラに関する知識を蓄え、金融の貸付を



資料3 若宮八幡宮神像(江戸時代/隅田川神社所蔵)/若宮八幡宮は、近世には若宮村の鎮守であったが、荒川放水路開削にあたり隅田川神社に合祀された。

行うなど様々な社会的機能を担っていたためです。かつての隅田宿の空間と考えられる現在の堤通付近には、木母寺や水神社のほか、多聞寺などの寺社も建立されました。隅田川神社に伝わる資料には、若宮八幡宮にまつわる信仰や、隅田宿に近接した「関屋の里」にまつわる寺社の存在を示唆するものが残されています。

## ■水神社の信仰と掘り起こされる「伝説」

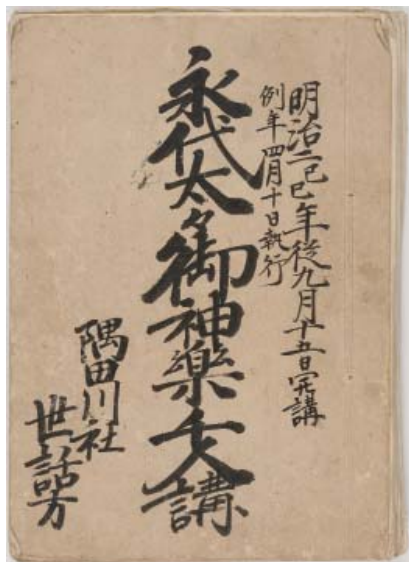
残念ながら、近世以前の水神社の様子を伝える資料はほとんど残されていません。隅田川神社の神主であった矢掛弓雄が江戸時代の縁起を元に編纂した「隅田川神社縁起」には、浮島に祀られた水神がその発祥であり、天徳年間(957~961)には宿の萌芽がみられ、その南方には隅田寺(のちの多聞寺)、東方には梅若寺(のちの木母寺)が建てられていたと記されています。また、水神社には源頼朝の隅田川渡河に関わる伝説が残されており、暴風雨に悩まされた頼朝が梅若寺に止宿して水神社に祈祷したところ、風波が静まり軍勢は武蔵国に入国できたことを伝えていています。

中世の隅田川渡河点は、古文書には「墨田(隅田)渡」などと表現されていました。19世紀の浮世絵には「むかし(往古)八今の地より少し川上にありしが中頃よりこの地にうつして今は橋場のわたしと唱ふ(『東都名所図会 隅田川渡しの図』)」とあって、その場所が現在の白鬚橋付近(近世の橋場の渡)のやや上流にあったことがわかります。水神社に源頼朝の渡河伝説が伝えられた背景には、その所在地

が中世の隅田川渡河点を臨む立地であることも大きく影響していると考えられるのです。

水神社は、江戸時代には浮世絵や『江戸名所図会』に「水神森」として鳥居や小さな社が描かれています。また、『新編武蔵風土記稿』には「神体龍神ニテ長七寸。例祭六月境十五日。多聞寺持」と記されており、多聞寺の管理であって常住の宗教者などはいなかったようです。現在の隅田川神社の境内には、隅田村の氏子たちによって文政7年(1824)に奉納された石燈籠のほか、かつては「水神宮」の碑とともに安置されていた神体の霊亀像など多くの石碑が残されています。隅田川神社境内に残された石碑群からは、かつての水神社が隅田村の鎮守として氏子たちに信仰されていただけでなく、水運＝隅田川水運に関わる人々からも広く信仰を受けていたことがわかります。

近代以降の隅田川神社の信仰とその範囲を知るうえでは、明治2年(1869)の『永代太々御神楽千人講』(資料4)という資料が参考になります。これは、毎年行われる神楽の執行に関係する記録です。



資料4 永代太々御神楽千人講  
(明治2年／隅田川神社所蔵)

ここには、「永代太々御神楽」が「千人講(水神講)」による積立金を元金とした貸付金の利息で行うことが記されており、隅田川神社を核とした頼母子講が存在していたことがわかります。また、『永代太々御神楽千人講』には、千人講を構成するメンバーの居住地と氏名が記されていますが、氏子である神社周辺地域のほかにも、対岸の浅草や神田、日本橋のほか、小菅村、六月村、千住村など、現在の足

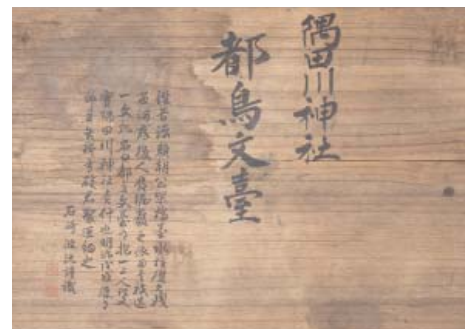


資料5 板碑(隅田川神社所蔵)／現在の堤小学校付近から出土した板碑。矢掛弓雄は、この板碑の紀年銘を文政5年と読んだ。

立区・荒川区・北区・千代田区・中央区・葛飾区・江戸川区・江東区などのほか、荒川や綾瀬川沿いの埼玉県や一部千葉県にもわたる広範囲な地域の人々の奉加によって行われている様子がうかがえます。この資料の作成が明治2年という時期であることを考えると、この広範囲な講の展開は江戸時代以来の河川に関わる結びつきが基盤となっていた可能性が考えられます。

水神社が隅田川にまつわる水の信仰を担っていたいっぽうで、かつての隅田宿とその周辺地域には、中世以来の源頼朝にまつ

わる伝説が名所記や寺社縁起などの形態をとって伝えられていました。19世紀の『嘉陵紀行』では、隅田村字上の小山源右衛門という百姓によって「文治二年大將軍頼朝 旗上八幡宮」と刻印された板碑が発掘され、小祠に祀られていたと記されています。残念ながら、この銘文は、当時の人々から見ても新しいものであったようで、それをそのまま史実と考えることは困難と言わざるを得ません。しかし、この板碑の存在は、19世紀の隅田村百姓のなかに、この地が源頼朝と深い関係を持っていたという認識が根付いていたことを証明しています。そして、この地にまつわる源頼朝の伝説は、江戸時代後期から明治期にかけてこのように「掘り起こされ」、やがて隅田川神社の源頼朝渡河伝説と結びついていくのです。



資料6 上：都鳥文台(文政4年／隅田川神社所蔵)／文政4年に橋場の橋の古杭で作った文台の甲板銘文。  
下：箱書(明治31年／隅田川神社所蔵)／隅田川神社神主である矢掛弓雄によって読まれた箱。文台の材となった橋について、頼朝による架橋と説明している。

## ■隅田川神社資料とすみだ

水神社は、やがてこの地に訪れた矢掛弓雄という人物によってその姿を変えることとなります。明治2年、隅田村の香取神社や村内稲荷などの神主を兼務していた矢掛弓雄が水神社の神主に任じられ、明治5年(1872)には無格社であった水神社は村社となりました。そして明治6年(1873)、現在の呼称である隅田川神社を正式な社号とします。このような動きのなかで、矢掛はこの地の歴史を研究し、隅田川と源頼朝の伝説に着目します。そして、『隅田川叢書』<sup>じょうし</sup>の上梓、「隅田川神社縁起」の編纂など精力的に活動しました。

矢掛がこの地へ来た時期については不明ですが、幕末から明治初年のことと考えられています。隅田川神社の神主に任じられた矢掛は、明治7年(1874)には隅田村の梅若神社(木母寺)、若宮村鎮守の若宮八幡宮などを附属社として神主を兼帯します。若宮八幡宮は、資料3を神体とした若宮村の鎮守でした。しかし、旧若宮村の一部が荒川放水路の開削(明治44年～昭和5年)によっ

て失われたため、そこに鎮座していた若宮八幡宮と田中稲荷は隅田川神社に合祀されました。こうした経緯から、両社に関わる資料は隅田川神社資料として伝来することとなったのです。

隅田川神社の資料を調査していて驚かされることは、資料に付着した夥しい<sup>おびただ</sup>煤<sup>すす</sup>です。これは、隅田川神社が繰り返し受けてきた洪水被害による汚泥です。

墨田区は、関東大震災や戦争による空襲によって、多くの資料が散逸および焼失してしまいました。しかし、資料の喪失という意味においては、河川に囲まれた低地帯という土地柄によって引き起こされる洪水被害も大きく影響していたのです。大きなものでは、天明6年(1786)7月12日から降り続いた大雨によって本所地域は「一向通路無之(水によって道が水没してしまい)」、18日には幕府は「御助船百艘計」を出しましたが、死者の数は夥しく、数え切れなかったと伝えられています(「江戸洪水記」(天明6年／当館蔵))。また、明治29年(1896)9

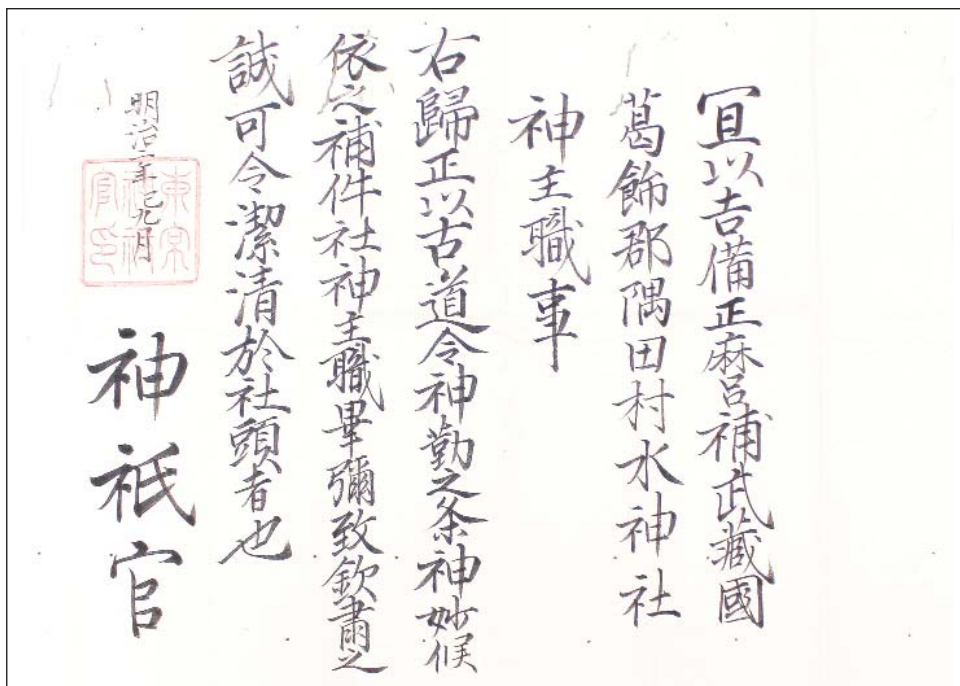
月16日には長雨から利根川が増水し、中川と木下川筋<sup>みずかさ</sup>の水高が増して堤防が決壊したことから洪水が起こっています。この洪水では、隅田村、寺島村、吾<sup>あづま</sup>孀村から吾妻橋付近まで浸水しており、水戸邸より牛島神社一帯は3～5尺の深さまで濁水が充満し、押上村から法恩寺・亀戸天神周辺も人家が水に浸り神社社務などが避難所となりました(「向島及ビ本所区水害一覧」(明治29年／当館蔵))。その後、明治43年(1910)には、8月5日頃からの雨と台風が重なった集中豪雨によって利根川、荒川水系の河川が氾濫し、現在の墨田区域でも墨堤が決壊、隅田川が氾濫して「天明以来大洪水」と呼ばれる大災害となっています。

今回展示する隅田川神社資料は、震災や戦災のみならず、こうしたあまたの洪水被害をくぐりぬけて地域に伝えられてきたものです。調査では、刷毛や柔らかい布などを使って丁寧に煤を払い、最終的には燻蒸を行ったうえで展示していますが、水害の痕跡はいたるところに見ることができます。

すみだという地域は、周囲に河川を臨む低地帯です。それは、水運の要衝として栄え、そこから生まれる伝承、生業や産業の発達など、水からの恩恵を享受するいっぽうで、水害などの被害を受けやすいということも意味しています。汚泥の付着した隅田川神社資料は、水辺に生まれた神社と地域の歴史の光と影を雄弁に物語っているのです。

(学芸員 小山貴子)

○参考文献 『隅田川神社の文化財－矢掛弓雄の世界 I－』(墨田区教育委員会, 2017年)



資料7 新補許状(明治2年／隅田川神社所蔵)／矢掛弓雄を水神社の神主に任じたもの。